

日本語学習者の聴解における推測

—推測の成功と失敗—

野田 尚史 (日本大学)

noda.hisashi@nihon-u.ac.jp

加藤 さやか (Universidad de Salamanca)

中島 晶子 (Université Paris Cité)

村田 裕美子 (Ludwig-Maximilians-Universität München)

梅澤 薫 (Durham University)

La inferencia en la comprensión auditiva del japonés como lengua extranjera

Análisis de aciertos y errores en estudiantes europeos

Hisashi NODA,

Sayaka KATO, Akiko NAKAJIMA, Yumiko MURATA, Kaoru UMEZAWA

要旨

日本語学習者が聴解でわからない語句や文があるとき、その意味をどのように推測しているかを調査した。その結果、推測には音声・語彙・文法・文脈という言語的な面からの推測と、日本の文化や自分の文化という文化的な面からの推測があることが明らかになった。また、推測が成功するか失敗するかについては、次のような傾向が明らかになった。

- (a) 大きな部分を推測したときには推測が成功しやすいのに対して、小さな部分を推測したときには推測が失敗しやすい。
- (b) 複数の手がかりから推測したときには推測が成功しやすいのに対して、1つの手がかりから推測したときには推測が失敗しやすい。
- (c) 推測結果がおかしいと思った場合に他の可能性を考えたときには推測が成功しやすいのに対して、他の可能性を考えなかったときには推測が失敗しやすい。

【キーワード】 聴解、推測、言語、文化

Resumen

La presente investigación se centra en la comprensión auditiva de los estudiantes de japonés con el fin de aclarar cómo estos infieren el significado de las palabras y frases que no comprenden. Según el resultado, las inferencias se pueden clasificar en dos tipos: inferencias basadas en los factores lingüísticos como fonética, léxico, gramática e hilo del argumento, e inferencias basadas en los contextos culturales, tanto de Japón como del su propio país. Asimismo, el análisis de los casos exitosos y fallidos de inferencia ha llegado a las siguientes conclusiones:

- a) Cuando la inferencia se hace desde una visión de conjunto, es más probable que termine con éxito,

mientras que, cuando se infiere sobre pequeños detalles, es más probable que fracase.

- b) Cuando la inferencia se basa en diversas pistas, es más probable que termine con éxito, mientras que, cuando se basa en una sola pista, es más probable que fracase.
- c) Al tener dudas sobre el resultado de la inferencia, si se contemplan otras posibilidades, es más probable que la inferencia acabe con éxito, de lo contrario, es más probable que falle.

Palabras clave: comprensión auditiva, inferencia, lengua, cultura

1 この論文の目的と研究の背景

1 では、1.1 でこの論文の目的について述べ、1.2 で研究の背景について述べる。そのあと、1.3 でこの論文の構成を示す。

1.1 この論文の目的

日本語学習者は、聴解でわからない語句や文があるとき、その意味を推測することがある。特に会話では、相手にわからない部分を聞き返さずに、推測することによって円滑にコミュニケーションを行うことがある。

この論文の目的は、学習者がどのように推測を行っているのかを調査によって明らかにすることである。具体的には、(1) と (2) を明らかにすることである。

(1) 学習者は何を手がかりに推測を行っているのか？

(2) どんなときに推測が成功しやすく、どんなときに推測が失敗しやすいのか？

聴解教育で推測の指導を適切に行うためには、学習者がどのように推測を行っているのか、また、どんなときに推測が成功し、どんなときに推測が失敗するのかを知る必要があるからである。

1.2 研究の背景

日本語学習者の「聞く」「話す」「読む」「書く」という言語活動の中では、「聞く」活動についての研究がいちばん遅れていると言ってよいだろう。それは、「聞く」活動は学習者のデータを集めるのがいちばん難しいからである。

「話す」活動と「書く」活動は、学習者に日本語を話してもらったり書いてもらったりすればデータが得られる。それに対して、「聞く」活動と「読む」活動は、学習者に日本語を聞いてもらったり読んでもらったりしただけではデータは得られない。聞いたり読んだりした日本語の意味をどう理解したかを確認するデータを集めなければならない。しかし、それを行うのは簡単ではない。

「読む」場合は、日本語を読んでから時間をかけて意味を理解することができる。それに対して、「聞く」場合は日本語を聞いて瞬時に意味を理解する必要がある。そのような違いがあるため、日本語を聞いてどのようにその意味を理解したかを確認するのは、日本語を読んでどのように意味を理解したかを確認するより難しい。

このように「聞く」活動についての研究を行うのは難しいが、日本語学習者も日本語母語話者も、「聞く」「話す」「読む」「書く」という言語活動の中で「聞く」活動にいちばん多くの時間を使っている人は少なくない。言語活動の中でも「聞く」活動は重要だと考えられる。

日本語学習者が実際に「聞く」活動を行うと、聞いてわからない部分が出てくることが多い。しかし、わからない語句を辞書で調べる時間的な余裕はなく、また、わからない部分をすべて相手に聞き返していると、円滑なコミュニケーションを行えなくなる。放送や講義など、一方的に話されるものを聞いているときには、聞き返すこともできない。そのため、実際の聴解では、わからない部分の意味を推測する能力が重要になる。

学習者にとって、わからない部分の意味を推測する能力を高めることは重要である。そのような能力を高める教育を行えるようにするためにも、学習者の推測について調査・研究を進める必要がある。

1.3 この論文の構成

この論文の構成は次のとおりである。次の2で先行研究を概観し、3で調査方法を説明する。その方法による調査の結果をもとに、4と5で学習者が行っている推測にはどんな種類があるかを述べる。4では言語的な面からの推測、5では文化的な面からの推測を取り上げる。そのあと、6で推測が成功する場合と失敗する場合の要因を分析する。そして、7でまとめを行い、今後の課題も示す。

2 日本語学習者の推測についての先行研究

2では、日本語学習者の推測についての先行研究として、2.1で読解における推測の研究を概観し、2.2で聴解における推測の研究を概観する。

2.1 読解における推測の研究

日本語学習者の推測についての研究としては、読解における推測の研究が多い。中村(2008)や野田編(2020)のような研究がある。

特に多いのは、漢語や外来語、多義語、複合語、慣用句など、知らない語句の意味をどのように推測するかという研究である。山方(2008)や崔(2015)をはじめとして、多くの研究がある。その中でも、漢字を中心に文字からどのように語句の意味を推測するかという研究が目立つ。

文字からの推測は読解では重要であるが、文字を使わない聴解では見られない。

2.2 聴解における推測の研究

聴解における推測の研究は、読解における推測の研究に比べると、低調である。水田(1996)、児崎(2007)、横山(2008)、野田(2024)のような研究があるが、研究の数でも研究対象や研究方法の多様性でも劣っている。

その原因は、聴解における推測は瞬時に行われることもあり、学習者が何を手がかりにどのような推測をしたかを調査するのが難しいからだと考えられる。

しかし、学習者にとって読解における推測より聴解における推測のほうが重要だと言える。読解では、わからない語句を辞書で調べたり、わからない部分を読み返したりして意味をゆっくり考える時間的な余裕がある。それに対して、聴解ではわからない語句を辞書で調べたり、わからない部分の意味をゆっくり考えたりする時間的な余裕がない。そのため、聴解では、読解以上に、わからない部分の意味を推測しながら聞くことが必要になるということである。

3 日本語学習者の聴解における推測の調査方法

3では、日本語学習者の聴解における推測の調査方法として、3.1で具体的な調査方法について、3.2で調査方法の特徴について、3.3で調査協力者について説明する。

3.1 具体的な調査方法

日本語学習者が聴解でわからない語句や文をどのように推測しているのかを明らかにするための調査を(3)から(5)の方法で行った。

- (3) それぞれの日本語学習者に初対面か初対面に近い人と自由に会話をしてもらい、そのときの映像を音声とともに録画しておく。
- (4) 会話が終わったあと、自分が会話したときの相手の映像とともにその音声を学習者に少しずつ聞いてもらい、相手と会話したときに相手の発話をどう理解したか、どこがわからなかったかといったことを学習者自身の母語か母語に準じる言語で話してもらおう。わからない部分の意味を推測した場合は、どのように推測したかについても話してもらおう。
- (5) 話してもらった内容だけではどのように理解したのか、なぜそのように理解したのかといったことがわからないときには、必要に応じて学習者に学習者の母語か母語に準じる言語で質問し、答えてもらおう。

この調査は学習者の聴解における推測だけを調査するものではなく、推測を含め、学習者の聴解における理解過程全体を調査するものである。この論文では、調査結果の中から推測に関わる事例を取り上げる。

なお、詳しい調査方法は(6)のコーパスに掲載されており、今回の調査結果の一部もこのコーパスに収録される予定である。

- (6) 野田尚史・加藤さやか・河内美和・北村亜耶・阪上彩子・島津浩美・首藤美香・丁美貞・高山弘子・中尾有岐・中島晶子・村田裕美子「日本語非母語話者の聴解コーパス」, 2020-. <https://www.nodahisashi.org/jsl-rikai/choukai/>

3.2 調査方法の特徴

3.1で述べた調査方法は、基本的に「思考発話法」(think-aloud method)と呼ばれるものである。Gerloff (1987)をはじめとして、読解研究でよく使われる方法である。

ただし、今回の調査は、野田(2024)や野田(2025)でも述べられているように、「思考発話法」では一般的とは言えない(7)から(9)のような特徴を持っている。

- (7) 学習者に聞いてもらうものは、調査する側が用意した一律のものではなく、それぞれの学習者が実際に聞く必要があるものである。
- (8) 理解した内容を学習者に話してもらったときの言語は、日本語ではなく、学習者の母語か母語に準じる言語である。
- (9) 学習者に一方的に話してもらっただけではなく、必要に応じて、調査する側が学習者に質問し、答えてもらう。

(7)の「聞いてもらうものは、それぞれの学習者が実際に聞く必要があるもの」だというのは、その人が必要としている聴解を行ってもらうことによって、できるだけ忠実に実際の聴解活動を再現するためである。今回の調査では会話の聴解を行ってもらったが、他人の会話を聞くのではなく、その学習者に実際に会話をしてもらい、会話が終わったあと、

自分が相手の発話をどう理解していたのかを話してもらった。

(8)の「理解した内容を学習者に話してもらうときの言語は、学習者の母語か母語に準じる言語」だというのは、学習者が日本語を聞いて、その意味をどのように理解したのかを正確に調査するためである。日本語で話してもらっても、どのように理解したのかは正確にわからないことがあるからである。理解した意味を確認するためには、その学習者の母語か母語に準じる言語を使うのがよい。

(9)の「必要に応じて、調査する側が学習者に質問し、答えてもらう」というのは、「思考発話法」の弱点を補うためにつけ加えた試みである。学習者が話してくれなかったことを確認したり、推測したときにどのように推測したのかを確認したりするために、必要に応じて質問を行うということである。

3.3 調査協力者

今回の調査に協力してもらったのは、スペインをはじめヨーロッパで日本語を学習している日本語学習者 57名である。

調査協力者の在住地は、スペインが 6名、フランスが 23名、ドイツが 19名、イギリスが 9名である。母語は、スペイン語が 6名、フランス語が 23名、ドイツ語が 19名、英語が 6名、中国語が 3名である。中国語を母語とする 3名はイギリス在住者である。日本語レベルは、中級が 43名、初級が 14名である。

調査は、2015年3月から2025年2月に行った。

この論文で取り上げる具体的な事例はスペイン語を母語とする日本語学習者に見られたものを中心にするが、同じような事例は他の言語を母語とする学習者にも見られた。

4 言語的な面からの推測の種類

調査結果を分析すると、日本語学習者の聴解における推測には、大きく分けて言語的な面からの推測と文化的な面からの推測があると考えられる。この4では、そのうち言語的な面からの推測を取り上げる。言語的な面からの推測を、何を手がかりにして推測したかによって4つに分類する。4.1では音声を手がかりにした推測について、4.2では語彙を手がかりにした推測について、4.3では文法を手がかりにした推測について、4.4では文脈を手がかりにした推測について述べる。

4.1 音声からの推測

音声からの推測というのは、わからない語句に含まれる音声から、その語句の意味を推測するものである。

たとえば、スペイン語を母語とする中級学習者は(10)を聞いて、わからない「中華料理屋」の意味を「中国料理店」と適切に推測した。

(10) この前、そのピソの5人でなんか、**中華料理屋**にいっしょに行ったことがあって。

この学習者は「中華料理屋」の意味がわからなかった。しかし、「チュー」(中)という音声を「中国」という意味、「リョーリ」(料理)という音声を「料理」という意味だと推測した。また、語の最後に付く「ヤ」(屋)という音声を「店」という意味だと推測し、「チューカリーリヤ」(中華料理屋)を「中国料理店」という意味だと適切に推測した。

この例は、わからない語句に含まれる3つの部分の音声を手がかりに、それぞれの部分

の意味を推測し、それを組み合わせて、わからない語句の意味を推測したものである。

4.2 語彙からの推測

語彙からの推測というのは、わからない語句の前後にある語句との意味的な関係から、その語句の意味を推測するものである。

たとえば、フランス語を母語とする初級学習者は(11)を聞いて、わからない「オフ」の意味を「割引きで」だと適切に推測した。

(11) ケーキが売れ残った日は、えと、50 パーセント**オフ**で買って、食べることができます。

この学習者は「オフ」がよく聞きとれず、その意味がわからなかった。しかし、「オフ」の前にある「50 パーセント」の意味と、「オフ」の後にある「食べることができます」の意味はわかった。そこで、わからない「オフ」と「50 パーセント」「食べることができます」との意味的な関係から、「オフ」の意味を割引きのシステムだと適切に推測した。

この例は、わからない語句と、その前にある語句や後にある語句との意味的な関係を手がかりに、わからない語句の意味を推測したものである。

4.3 文法からの推測

文法からの推測というのは、わからない語句の前後にある文法形式の機能や、わからない語句と前後の語句との文法的な関係から、語句や文の意味を推測するものである。

たとえば、スペイン語を母語とする初級学習者は(12)を聞いて、わからない「近いしいか」の意味を「ほうがよい」だと、ほぼ適切に推測した。

(12) 遠いけど、まあ行けるぐらい。でも、東京に住んだほうが**近いしいか**、って感じ [笑う]。

この学習者は「トーキョーニスンダ」(東京に住んだ)の部分の意味はわかったが、「チカイシイカ」(近いしいか)の部分「チカイシイカ」と聞きとったこともあり、その部分の意味はわからなかった。しかし、「ホーガ」(ほうが)は比較を表すと考えて、「トーキョーニスンダホーガチカイシイカ」の意味を「東京に住むほうがよい」だと、ほぼ適切に推測した。

この例は、わからない部分の前にある比較を表す文法形式「ホーガ」(ほうが)を手がかりに、わからない部分の意味を含め、この文の意味を推測したものである。

4.4 文脈からの推測

文脈からの推測というのは、わからない語句や文の前後にある文の内容との関係から、わからない語句や文の意味を推測するものである。

たとえば、スペイン語を母語とする初級学習者は、あさってのスペイン語教授法 (ELE) の試験について相手に質問し、相手はその質問に答えた(13)を聞いて、わからない「イーカンジ」(いい感じ)の意味を「心配しているわけではないけれど、試験は難しいと思っている」だと不適切に推測した。

(13) 相手：日本語を勉強してるスペイン人の友だちはいるけど、なんだろう、ほかの人とはしゃべるのがまだ難しいなって感じ。で、あしたも、あした？ あさってに試験があつて、あの。

学習者：お、スペイン語の試験？

相手：スペイン語のELE。

学習者：あ、はい、ELE。どうですか [笑う]。

相手：いい感じ [笑う]。いい感じです。

この学習者は、「イーカンジ」（いい感じ）の意味はわからなかった。しかし、相手がこれより前の部分で「スペイン語で話すことなどが難しい」という話をしていたので、「イーカンジ」（いい感じ）の意味を「試験は難しいと思っている」だと不適切に推測した。

この例は、わからない文の前にあった文脈を手がかりに、わからない文の意味を推測したものである。

5 文化的な面からの推測の種類

5 では、日本語学習者の聴解における推測のうち文化的な面からの推測を取り上げる。文化的な面からの推測を、何を手がかりにして推測したかによって2つに分類する。5.1 では日本の文化からの推測、5.2 では自分の文化からの推測について述べる。

5.1 日本の文化からの推測

日本の文化からの推測というのは、わからない語句や文に関連した日本の文化の知識から、わからない語句や文の意味を推測するものである。

たとえば、スペイン語を母語とする中級学習者は(14)を聞いて、わからない「タマゴカケゴハン」（卵かけご飯）の意味を「卵を生で食べる料理」だと、ほぼ適切に推測した。

(14) 生活にはだいぶ慣れたんですけど、あの一、なんだろうな。おいしいお米が食べたい [笑う]。おいしいお米が食べたいって。あと、卵かけ、おっ、**卵かけご飯** 食べたことあります？

この学習者は、「タマゴ」（卵）の意味はわかったが、「カケゴハン」（かけご飯）の意味はわからなかった。しかし、相手がわざわざ「食べたことがあるか」と聞いてくるということはスペインにはない、日本特有のものだろうと思い、卵を生で食べる料理だと、ほぼ適切に推測した。

この例は、わからない語句の前にあった「タマゴ」（卵）に関連した日本の文化の知識を手がかりに、わからない語句の意味を推測したものである。

5.2 自分の文化からの推測

自分の文化からの推測というのは、わからない語句や文に関連した自分の文化の知識から、わからない語句や文の意味を推測するものである。

たとえば、スペイン語を母語とする初級学習者は、相手がその人の出身地である埼玉県熊谷について話した(15)を聞いて、この文の意味を「海に面していないのに暑い」だと不適切に推測した。

(15) そうそう [笑う]、東京の近くで、で、でも、なんか、熊谷っていうところなんだけど、そこはうーんと、もう海もないしなんもないから、すごく暑いところで有名。

この学習者は、「ウミモナイ」（海もない）や「スゴクアツイ」（すごく暑い）の意味はわかったが、「海がない」と「暑い」の関係はわからなかった。しかし、自分の出身地であるムルシアでは海に近いと湿気が多くて暑いという知識から、海がないならそれほど暑

くないはずなのに、相手の出身地は海に面していないのに暑いということだと、不適切に推測した。

この例は、わからない文に関連した自分の文化の知識を手がかりに、わからない文の意味を推測したものである。

6 推測の成功と失敗の要因

6では、調査結果をもとに、推測が成功する場合と失敗する場合の要因を3つの観点から分析する。6.1では推測する部分の大きさという観点から、6.2では推測の手がかりの数という観点から、6.3では推測結果の再検討の有無という観点から、推測が成功する場合と失敗する場合の要因を分析する。

6.1 推測する部分の大きさについての要因

調査結果を分析すると、推測が成功するか失敗するかには、推測する部分の大きさが関係していると考えられる。具体的には、(16)のような傾向があるということである。

(16) 大きな部分を推測したときには推測が成功しやすい。それに対して、小さな部分を推測したときには推測が失敗しやすい。

たとえば、スペイン語を母語とする中級学習者は相手が「日本の小学校には給食というものがある」という話に続けて話した(17)を聞いて、よくわからない「ホカワタベモノワモッテイッチャダメダカラ」(ほかは食べ物は持って行っちゃだめだから)の意味を「別の方法で食べ物を持って行ってはいけない」か「他の時間に食べてはいけない」だと、ほぼ適切に推測した。

(17) 12時とかそのぐらいかな。で、ほかは食べ物は持って行っちゃだめだから、そうなんか、朝行って、お昼食べて、で1回帰るのなしで、そのままあ4時ぐらいまで学校やって、で帰っておやつ食べる、みたいな感じだったから、ぜんぜん違う。

この学習者は「ホカワタベモノワモッテイッチャダメダカラ」(ほかは食べ物は持って行っちゃだめだから)の意味がよくわからなかった。しかし、「ダメ」(だめ)は「～してはいけない」という禁止を表す構文だと考えて、食べ物に関する禁止事項を話していると適切に推測した。

この推測は、「ダメ」(だめ)を手がかりに、文全体という大きな部分を推測して、成功したと考えられる。

一方、たとえば、ドイツ語を母語とする中級学習者は(18)を聞いて、わからない「ダイトカイ」(大都会)の意味を「人が会うスポット」だと不適切に推測した。

(18) でも[大学名]は、あの渋谷に近いから、遊ぶところは、**大都会**だと思う。遊ぶところはたくさんあると思う。

この学習者は「ダイトカイ」(大都会)を「ダイドーカイ」と聞きとって、「ドー」を「動」という意味、「カイ」を「会」という意味だと考えて、「ダイトカイ」(大都会)の意味を「人が会うスポット」だと不適切に推測した。

この推測は、「ドー」や「カイ」の音声から、「ドー」や「カイ」から構成される「ダイトカイ」(大都会)という小さな部分を推測して、失敗したと考えられる。

6.2 推測の手がかりの数についての要因

調査結果を分析すると、推測が成功するか失敗するかには、推測するときの手がかりの数が関係していると考えられる。具体的には、(19)のような傾向があるということである。

(19) 複数の手がかりから推測したときには推測が成功しやすい。それに対して、1つの手がかりから推測したときには推測が失敗しやすい。

たとえば、スペイン語を母語とする中級学習者は相手が日本の高校について話した(20)を聞いて、わからない「コーバイ」(購買)の意味を「パンなどが買える自動販売機か小さな売店」だと、ほぼ適切に推測した。

(20) そう、なんかパンとか売ってる小さい、なんか**購買**って言うんですけど、そういう場所はあったけど、そこで別に何かを食べられるわけではなかった。

この学習者は「コーバイ」(購買)の意味がわからなかった。しかし、「コーバイ」(購買)の前にある「ウッテル」(売ってる)という語句との関係という手がかりと、日本の高校についての文化的な知識という手がかりから、「コーバイ」(購買)の意味を「パンなどを買える場所」だと推測した。また、「コーバイ」(購買)の「バイ」という音声を「自動販売機」の「バイ」(売)だと考えて、自動販売機か小さな売店だと推測した。

この推測は、わからない「コーバイ」(購買)の意味を複数の手がかりから推測して、成功したと考えられる。

一方、たとえば、スペイン語を母語とする初級学習者は(21)を聞いて、わからない「キテナイミタイデス」(来てないみたいです)の意味を「会いに来てみたい」だと不適切に推測した。

(21) 先生がまだ**来てないみたい**ですね。

この学習者は否定の「ナイ」(ない)があることに気づかずに、「キテ ミタイ」を「来る」と「試す」という意味の「てみる」と願望の「たい」の組み合わせだと推測した。主語が「先生が」であることや、研究室に先生がいないという文脈・状況をあわせて考えずに推測した。

この推測は、複数の手がかりからではなく、1つの手がかりだけから推測して、失敗したと考えられる。

6.3 推測結果の再検討の有無についての要因

調査結果を分析すると、推測が成功するか失敗するかには、推測できなかつたり推測結果がおかしいと思ったりした場合に、その推測結果を再検討するかどうかに関係していると考えられる。具体的には、(22)のような傾向があるということである。

(22) 推測できなかつたり推測結果がおかしいと思ったりした場合に、その推測結果を再検討したときには推測が成功しやすい。それに対して、その推測結果を再検討しなかったときには推測が失敗しやすい。

たとえば、英語を母語とする中級学習者は(23)を聞いて、最初は推測できなかった「ミナミハンキュー」(南半球)の意味を、最終的には「南半球」だと適切に推測した。

(23) **南半球**だから、**夏が終わって今から秋が始まる**時期です。

この学習者は「ミナミハンキュー」(南半球)の意味を推測できなかった。また、「ナツガオワッテイマカラアキガハジマル」(夏が終わって今から秋が始まる)というのも、日本では今から夏が始まるので、おかしいと思った。

しかし、会話をしている中で相手が今オーストラリアにいることがわかったため、「ナ

ツガオワッテイマカラアキガハジマル」(夏が終わって今から秋が始まる)ということが理解できた。そして、「ミナミハンキュー」(南半球)も、「ミナミ」(南)という語は知っていたので、「南半球」のことだと推測した。

この推測は、「ミナミハンキュー」(南半球)の意味が推測できず、ナツガオワッテイマカラアキガハジマル」(夏が終わって今から秋が始まる)というのもおかしいと思っていたが、相手がオーストラリアにいたことがわかったあと、「ミナミハンキュー」(南半球)の意味を再検討したため、成功したと考えられる。

一方、たとえば、スペイン語を母語とする初級学習者は、相手が話した「大仏」の意味を相手に質問し、相手はその質問に答えた(24)を聞いて、わからない「カオノゾー」(顔の像)の意味をまったく推測できなかった。

(24) なんか、あの [笑う]、顔、顔の像 [笑う]。

この学習者は「カオ」(顔)の意味はわかったが、「ゾー」(像)を動物の「象」だと考えたために意味がわからなくなった。まったく推測できないのであれば、たとえば「ゾー」は動物の「象」ではなさそうだと考えて、「顔」だけから意味を考えるほうがよかったと考えられるが、「カオノゾー」(顔の像)の意味を再検討しなかった。

この推測は、「ゾー」(像)を動物の「象」だと考えて、まったく意味がわからなくなったが、その推測を再検討しなかったため、失敗したと考えられる。

7 この論文のまとめと今後の課題

7では、この論文のまとめを行い、今後の課題を示す。7.1でこの論文のまとめを行ったあと、7.2で学習者の母語による違いについて述べる。最後に、7.3で今後の課題を示す。

7.1 この論文のまとめ

この論文では、日本語学習者が聴解でわからない語句や文があるとき、その意味をどのように推測しているかを分析した。

調査は、(25)の方法で行った。

- (25) a. 日本語学習者に初対面か初対面に近い人と自由に会話をしてもらう。
 b. 会話のあと、その会話の映像とともに音声を学習者に聞いてもらい、相手の発話をどう理解したか、わからない部分の意味をどのように推測したかを自分の母語か母語に準じる言語で話してもらう。
 c. 話してもらっただけではわからないことを学習者に質問し、答えてもらう。

分析の結果、推測には(26)のような言語的な面からの推測と、(27)のような文化的な面からの推測があることが明らかになった。

(26) 言語的な面からの推測

- a. 音声からの推測：わからない語句に含まれる音声から、その語句の意味を推測する。

例：「チューカリーリヤ」(中華料理屋)を、「チュー」「リョーリ」「ヤ」という音声から「中国」「料理」「店」の組み合わせで、「中国料理店」だと適切に推測する。

- b. 語彙からの推測：わからない語句の前後にある語句との意味的な関係から、その語句の意味を推測する。

例：「オフ」の意味を、その前にある「50 パーセント」とその後にある「食べることができます」との意味的な関係から、「割引きのシステム」だと適切に推測する。

- c. 文法からの推測：わからない語句の前後にある文法形式の機能や、わからない語句と前後の語句との文法的な関係から、語句や文の意味を推測する。

例：「チカイシイーカ」（近いしいか）の意味を、その前にある「トーキョーニスンダホーガ」（東京に住んだほうが）の「ホーガ」（ほうが）は比較を表すと考えて、「東京に住むほうがよい」だと、ほぼ適切に推測する。

- d. 文脈からの推測：わからない語句や文の前後にある文の内容との関係から、わからない語句や文の意味を推測する。

例：試験について言った「イーカンジ」（いい感じ）の意味を、相手がこれより前の部分で「難しい」という話をしていたので、「難しい」だと不適切に推測する。

(27) 文化的な面からの推測

- a. 日本の文化からの推測：わからない語句や文に関連した日本の文化の知識から、わからない語句や文の意味を推測する。

例：「タマゴカケゴハン」（卵かけご飯）の意味を、相手がわざわざ「食べたことがあるか」と聞いてくるということはスペインにはない、日本特有なことだろうと思い、「卵を生で食べる料理」だと、ほぼ適切に推測する。

- b. 自分の文化からの推測：わからない語句や文に関連した自分の文化の知識から、わからない語句や文の意味を推測する。

例：「ウミモナイシナンモナイカラ、スゴクアツイ」（海もないしなんもないから、すごく暑い）の意味を、自分の出身地では海に近いと湿度が多くて暑いという知識から、「海に面していないけれども暑い」ということだと、不適切に推測する。

また、推測が成功するか失敗するかについては、(28) から (30) のような傾向が明らかになった。

- (28) 推測する部分の大きさ：大きな部分を推測したときには推測が成功しやすいのに対して、小さな部分を推測したときには推測が失敗しやすい。

例：「ホカワタベモノワモッテイッチャダメダカラ」（ほかは食べ物を持って行っちゃだめだから）という大きな部分の意味を、「ダメ」（だめ）を手がかりに推測して成功する。それに対して、「ダイトカイ」（大都会）という小さな部分の意味を、「ドー」や「カイ」の音声から推測して失敗する。

- (29) 推測の手がかりの数：複数の手がかりから推測したときには推測が成功しやすいのに対して、1つの手がかりから推測したときには推測が失敗しやすい。

例：「コーバイ」（購買）の意味を、前にある語句との関係や、日本の文化についての知識という複数の手がかりから推測して成功する。それに対して、推測を表す「ミタイ」（みたい）の意味を、その文の主語やそのときの文脈・状況を手がかりにせずに、文法についての1つの手がかりだ

けから推測して失敗する。

- (30) 推測結果の再検討の有無：推測結果がおかしいと思った場合に他の可能性を考えたときには推測が成功しやすいのに対して、他の可能性を考えなかったときには推測が失敗しやすい。

例：推測できなかった「ミナミハンキュー」（南半球）の意味を、相手が今オーストラリアにいるということを聞いたあと、再検討して成功する。それに対して、推測できなかった「カオノゾー」（顔の像）の意味を、動物の「象」だと考えたまま、「顔」だけから意味を再検討するといったことをしなかったために失敗する。

7.2 学習者の母語による違い

この論文では、学習者の母語によって聴解における推測がどのように違うのかという問題は取り上げていない。それは、聴解では学習者の母語による違いがあまり見られないからである。

今回の調査に協力してもらったのは、ヨーロッパで日本語を学習している学習者である。母語はスペイン語、フランス語、ドイツ語、英語、中国語である。これらの言語を母語とする学習者の間では、母語によって聴解における推測が大きく違うことはなかった。それだけではなく、「日本語非母語話者の聴解コーパス」に収録されている韓国語やミャンマー語など、他の言語を母語とする学習者と比べても、聴解における推測が大きく違うことはないようである。

もちろん、学習者の日本語レベルが違えば、語彙や文法についての知識も違い、聴解能力も違うので、何をどのように推測するかも違ってくる。また、日本の文化についての知識や自分の文化についての知識は個々の学習者によって違うので、何をどのように推測するかも違ってくる。しかし、母語の違いによって何をどのように推測するかが大きく違うことはないと言える。

学習者の母語によって何をどのように推測するかが大きく違わないのは、聴解における推測の特徴と言える。読解では、学習者の母語そのものではないが、漢字系学習者か非漢字系学習者かで、何をどのように推測するかに違いが見られるからである。

漢字系学習者というのは、日本語を学習する前から中国語などの漢字の意味を知っていた学習者である。このような学習者は、読解ではわからない語句を漢字の意味についての知識から推測することが多く、その推測が成功しやすい。一方、非漢字系学習者というのは、日本語を学習する前は中国語などの漢字の意味を知らなかった学習者である。このような学習者は、読解ではわからない語句を漢字の意味についての知識から推測することが漢字系学習者より少ないと言える。

漢字の意味を知っていることは読解にとっては非常に有利であるが、聴解ではそれほど有利だとは言えない。漢字という文字とその意味はたとえば中国語と日本語で大きく違うことはないので、中国語の漢字を知っていれば、日本語の読解では有利になる。しかし、漢字の音声はたとえば中国語と日本語では違いが大きいので、中国語の漢字の音声を知っていても、日本語の聴解ではあまり有利にならないということである。

7.3 今後の課題

今後の課題としては、(31)と(32)が考えられる。

(31) 日本語学習者の聴解における推測の調査をさらに進める。

(32) 聴解で適切な推測が行えるようにするための教材を作成する。

(31) は、この論文で述べたような調査を、さまざまな母語のさまざまな日本語レベルの学習者に協力してもらって行うことである。その際、会話の聴解だけではなく、放送や講義など、一方的に話されるものを聞くタイプの聴解の調査も行うのがよい。

そのような調査を進めていけば、聴解において学習者が何をどのように推測しているのか、また、その推測が成功するときと失敗するときの違いは何かといったことがさらに明らかになるはずである。そうなれば、聴解でわからない部分があったときにその意味をどのように推測すればよいかも明らかになり、聴解教育で推測についての教育を行えるようになる。

一方、(32) は日本語学習者の聴解における推測の調査で明らかになった知見をもとに、推測についての教育を行えるようにする教材を作成することである。

これまでの聴解教育では、わからない部分があったときに、その部分の意味をどのように推測すればよいかということを教育することはあまりなかった。それは、これまでの聴解教育では、学習者が知っている語彙や文法に合わせて学習者に聞いてもらう音声を作成していることが多かったからである。そのような聴解では、わからない部分が多い学習者はそれまでの学習が不十分だっただけだと判断される。そのため、わからない部分を推測する必要があるという考えは出てこない。

しかし、実際の聴解では、わからない部分が出てくるのが普通である。そのときには、推測するしかない。実際の聴解を考えると、聴解教育で推測を扱う必要性は高い。

どんな学習者も適切な推測を行えるようにするためには、聴解で適切な推測が行えるようにするための教材を作成する必要がある。

<参考文献>

- 児崎静佳 (2007). 「聴解授業における学習者の推測力を育成する教師の問いかけ—授業観察から学んだこと—」『早稲田大学日本語教育実践研究』, 6, 173-180. <http://hdl.handle.net/2065/26576> (2025年9月1日)
- 崔娉 (2015). 「中国語を母語とする日本語学習者における未知漢字語彙の意味推測」『第二言語としての日本語の習得研究』, 18, 103-119, 凡人社.
- 中村かおり (2008). 「推測読み」における読解ストラテジーの観察」『拓殖大学日本語紀要』, 18, 81-95, 拓殖大学国際部.
- 野田尚史 (2024). 「日本語学習者の聴解困難点と推測技術」『日本語プロフィシエンシー研究』, 12, 42-56, 日本語プロフィシエンシー研究学会.
- 野田尚史 (2025). 「日本語学習者による日本語の理解過程—理解困難点と推測技術—」『語用論研究』, 26, 1-19. https://doi.org/10.60414/pragmatics.26.0_1
- 野田尚史編 (2020). 『日本語学習者の読解過程』ココ出版.
- 水田澄子 (1996). 「独語聞き取りに見られる問題処理のストラテジー」『日本語教育論集 世界の日本語教育』, 6, 49-64. <https://doi.org/10.20649/00000230>
- 山方純子 (2008). 「日本語学習者のテキスト理解における未知語の意味推測—L2知識と母語背景が及ぼす影響—」『日本語教育』, 139, 42-51. https://doi.org/10.20721/nihongokyoiku.139.0_42

- 横山紀子 (2008). 『非母語話者日本語教師再教育における聴解指導に関する実証的研究』 ひつじ書房.
- Gerloff, P. (1987). Identifying the unit of analysis in translation: Some use of think-aloud protocol data. In C. Færch & G. Kasper (Eds.) *Introspection in second language research* (pp. 135-158). Multilingual Matters.